



ギャ問題だ。長年くすぶっていたこの問題の決着を図るため、2016年8月、アウンサンスーチーは軍の反対を押し切ってまでして、元国連事務総長のコフィ・アナンにロヒンギャ問題の調査と解決案の提示を求めた。ロヒンギャへの国籍付与の検討をも含む包括的なコフィ・アナンの提案（2017年8月24日公表）に対して、アウンサンスーチーはその全面的な順守を約束した。

しかしその翌日の8月25日にアラカン・ロヒンギャ救世軍（ARSA ベンガル系イスラム教徒反政府武装組織）による軍・警察施設に対する同時多発襲撃が起こり、それによって軍・警察のロヒンギャ住民への大規模な迫害が始まり、70万人という世界最大規模の難民問題となった。このような形でロヒンギャ問題解決の糸口が葬られたことは実に不運だ。アウンサンスーチーは、ロヒンギャの人道危機に対して実質的な国家元首としての責任を果たしていない、と糾弾され、あれだけ国際社会から民主化の旗手として持ち上げられてきた名声は地に落ち、さらにビルマ政府は、国際刑事裁判所からロヒンギャの人々に対してジェノサイドを行ったとして提訴されるに至った。しかし、アウンサンスーチーは、このような国際社会からの糾弾に動じることなく、長年自分を軟禁状態に置いてきた国軍を擁護する立場をとった。彼女は2011年のテインセイン大統領との初の直接会談で、国益のために国軍と共存するという政治家としての冷徹な決断をしたのだろう。ロヒンギャ問題だけではなく、一時和解の方向に向かっていた他の民族とも、ここにきて武力衝突が再燃している。その他、急速な自由化による格差の拡大、気候変動の影響（中部地域の旱魃、沿岸部の海面上昇）、そして北に国境を接する中国の怒涛のような進出が、同時にビルマを激しく揺さぶっている。

政権に就いたNLDは、早速民主化の流れの中でテレビ中継されることになった国会での答弁の矢面に立たされ、皮肉にも軍政を支えてきた官僚やテクノクラートに発言要領の作成を依存しなければならないことになった。今でも影で実権を握っているのは軍政を生き延びた役人たちかもしれない。NLDの活動家がいかに献身的であっても民主化を叫ぶことしかできなければ実際に国を運営することはできない。彼らは国づくりのビジョンと方法をいまだに編み出していないのだ。そのような危機感を抱いたタンミンウーは、あらためて国民レベルの真剣な議論を提唱している。ビルマ国民はビルマをどのような国にしたいのか、と。タンミンウーは、特に経済のあり方についての議論が希薄なことを危惧している。民主化より一足早く、経済は80年代末頃から社会主義経済から自由市場経済へと移行し始めたが、闇経済がはびこることになった。今ではミャンマーの辺境地域は覚醒剤の一大密造拠点となっているように、違法経済活動（希少動物や鉱物の密貿易を含む）が野放し状態であり、それが犯罪組織や武装組織を潤し社会を蝕んでいる。

それでも確かにビルマは軍政時代に比べればはるかに豊かになった。大型ショッピングモールが無数開店した。言論の自由も格段に改善したし、インターネットなどには規制はない。スマホはほぼ100%普及した。しかし、タンミンウーは問いかける。これが本当に人々が長年求めてきた民主的な国の形なのか、と。また、外患内憂に直面するビルマであればこそ、いまだに国民の間に軍政時代の記憶が生々しく残っていると看做しても、敢えて新たな意味での強い国家を標榜すべき、と主張している。さもなければビルマはアジアの中で一人破綻国家に転落する、と警鐘を鳴らしている。タンミンウーも憂国のナショナリストだ。そして本著をこう締めくくっている。

“Perhaps, most of all, Burma needs a new project of the imagination.”

タンミンウーは本著の出版後、世界各地で講演を精力的に行っている。コロナ下でのオ

